

異世界転生したら

過保護な剣士の独占愛に溺れそうです





## ◆ エアハルト

マインシュタット王国国王。

珍しいものを収集する癖があり、  
ハルたちを事件に巻き込んでいく。

## ◆ ダシエル

元貴族。特別な力を持つ魔術師。  
明るく気さくだが、恋愛面では猪突猛進。  
ハルの魔道具師としての才能に惚れ込む。

## ◆ ハル

明るくしっかり者だが、  
どこか天然な一面も持つ異世界転生者。  
恋愛とは無縁の生活を送ってきた。  
ランバートを誰よりも信頼している。

## ◆ ランバート

S級冒険者で、一人旅をしていたが  
ハルと行動を共にすることになる。  
好きな相手には一途な一面も。

## ◆ マテイアス

利益のためなら手段を選ばぬ闇商人。  
胡散臭さ全開だが、仲間と認めた人たちの前では人情深い。

登場人物紹介



## 第一章

地を這うような唸り声に意識が揺さぶられる。

ぼんやりと目を覚ました七瀬遙人は、すぐ目の前に恐ろしい獣がいることに気づいて弾かれたように起き上がった。

全部で七、八頭はいるだろうか。

薄汚れた獣たちは牙を剥き出し、鋭い爪を見せつけながら遙人を喰らってやろうと迫ってくる。

「な、なんで？ どうしてこんなことに……？」

それ以前に、ここがどこかもわからない。

近くにあった小石を投げつけてみたものの、獣たちは怯むどころか赤い目をギラギラと光らせ、涎を垂らしながらさらに距離を詰めてきた。

「うそ、うそ、どうしよう……！」

逃げなくちゃと思うのに怖くて足が動かない。尻餅をついたまま懸命に後退るうちに、ドン、と背中が木の幹に当たった。

「……っ」

行き止まりだ。

息を呑み、ぶるぶるふるえる遙人を目がけて獣の群れがいつせいに襲いかかってくる。

——どうしよう。助けて……！

ぎゅっと目を瞑ったその時だった。

「死にたくなければ伏せろ！」

「わっ」

後ろから力強い声が飛んできたかと思うと、強引に平伏させられる。

その直後、空を切り裂くような音とともに獣たちの絶叫が響き渡った。

何が起こったのか、まるでわからなかった。

血の匂いがしたのは一瞬のことで、それもすぐに掻き消される。「もういいぞ」という低い声におそるおそる顔を上げると、あんなにいたはずの獣たちは一頭残らずいなくなっていた。

「……え？」

どこに行ってしまったのだろう。さつきから不思議なことばかりだ。

地面にへたりこんだままキョロキョロと辺りを窺っていると、遙人を守るように立ち塞がっていた男性がゆっくりこちらをふり返った。

ずいぶん大柄な人だ。身長は一八〇センチ半ば、あるいはそれ以上あるだろうか。肩幅は広く、胸板も厚く、鍛え抜かれた男らしさに目を奪われた。

黒い革の鎧を纏い、右肩には分厚い肩当てを、反対の肩には風雨を凌ぐマントを羽織っている。

年齢は二十七、八歳といったところだろうか。襟足の長い焦げ茶の髪を後ろに撫でつけ、剣を手に仁王立ちする姿は堂々とした威厳に満ちていた。

まるでファンタジーの世界から抜け出してきたみたいだ。

たくさんの獣を倒したばかりだというのに、息を乱すどころか、表情ひとつ変えずに男性は口を開いた。

「怪我はないか」

「……え？ あつ、はい」

「この辺りはよく魔獣が出る。護身の心得がないのなら深入りするのはやめておけ」

男性は、遙人の力を見定めるように琥珀色の目をすかめめる。剣を収めるなり踵を返そうとするのを見て、遙人は慌てて追いすがった。

「あ、あのつ。さっきの……やつつけたんですか？ あんなにたくさんいたのに？」

「いつものことだ。ドロップアイテムはもうぞ」

ぶつきらぼうに言い捨てるなり、男性は地面に散らばったものを黙々と集めはじめる。それをぼんやり見ながら遙人は頭の中を「？」でいっぱいにした。

——ま、魔獣って言った？ あと、ドロップアイテムって何……？

忙しそうにしているところへ声をかけるのも気が引ける。

どうしようかと思いつきながら何気なく腰の辺りに手をやった遙人は、ベルトに小さな鞆がついていることに気がついた。ずいぶんと年季の入った、手作り感あふれる茶色の革バッグだ。

チラと中を覗いた瞬間、遙人は目を丸くした。

「何これ??？」

入っていたのは見たこともないものばかりだったからだ。

宝石のようにきらきら光る石や虹色に輝く魚の鱗<sup>うろこ</sup>、銀色の鱗粉<sup>りんぷん</sup>を纏<sup>まと</sup>った蝶の羽根、小瓶に入った粉末もあれば、乳白色の怪しい液体もある。およそ自分で集めたとは思えないそれらのアイテムを取り出しては眺めているうちに、唐突にある記憶が蘇<sup>よみがえ</sup>った。

「そうだ！」

——神様にもらったんだっけ。

記憶のはじまりは定かではないものの、どうやら自分は手違いで命を落としてしまったらしく、神を名乗る人物から「お詫<sup>わ</sup>びに」といろいろなものをもらった。

そう——仕事帰りに向こうから猛スピードの車が突っ込んできた。ヘッドライトが眩しくて、両腕で顔を覆った瞬間、キイイッ！と急ブレーキの音を聞いた。間を置かず、ドン！という強い衝撃も……

遙人は子供の頃からモノづくりが大好きで、家電メーカーの技術開発者として働いていた。

そんな事情を知った神様が「モノづくりを続けられるように」と魔力や錬成スキル、言語能力を付与してくれただけでなく、初心者向けの参考書や魔石、素材などのお役立ちアイテムをあこれ無限収納に詰め込んでくれた。その名のとおり収納容量は無限大、さらに物体の状態をキープしたまま持ち運べる優れものだ。

ついでに、外見もこちらの世界に合わせて変えてくれた。

二十五歳だった身体は十八歳まで若返り、髪は輝くブラウンに、瞳もアクアブルーに一変した。鏡を見せられた時の衝撃といったら！一言で言うなら美少年という言葉がぴったりな、中性的な顔立ちの自分が映っていて驚いた。

生成りのシャツに、くすんだグリーンの前開きベストを重ね、黒のズボンにロングブーツという出で立ちに整えられた遙人は、神様に「さあ、新しい世界で存分に活躍ください！」とばかりにどこかへ飛ばされ、気づいたら森にいたというわけだ。

「そうだった……………」

とんでもないことになってしまった。

思わず両手で顔を覆った遙人だったが、大きくひとつ深呼吸をして気持ちを切り替え、また勢いよく頭を上げた。

どれだけ過去を思い返しても今が変わるわけじゃない。

それなら、未来を少しでも良くするために行動していこう。

「よし」

自分で自分に気合いを入れると、遙人はその場に腰を据えて鞆から参考書を取り出した。文庫本ほどの大きさで、表紙には『素材図鑑』とある。

異世界の文字なのに、言語能力のおかげでスラスラ読めるのがなんとも不思議だ。

それによると、ドロップアイテムとは『敵を倒した際に入手できる報酬アイテム』のことらしい。

必ず出るといわけではないようだが、多くの魔獣や魔鳥は牙や爪、あるいは魔毒など、種の特徴となるものを落としていく。

これらは武器や道具の素材になるため、ドロップアイテムを集める専門の冒険者もいれば、買い取る素材屋も多く存在する。ごく稀に「レアアイテム」と呼ばれる貴重品が出現し、マニアの間で高値で取引されるのだとか。珍しいものを集めて商売する輩<sup>やから</sup>までいるそうだ。

参考書から顔を上げ、アイテムを拾う男性を眺めながら、遙人は「なるほどなあ」と呟いた。

どうやらこは、これまで生きてきた世界とは何もかもが違いそうだ。

「すごいとこに來ちゃったな」

それでも不思議と不安はなかった。

もともとの楽天的な性格に加え、神様にもらった錬成スキルのおかげでこちらの世界にも馴染めそうだと思えたからだ。そこにモノづくりのわくわくが加わればもう無敵だ。

こうして触れるだけで、鞆に入っていた青い石が〈水の魔石〉だとわかる。水を発生させる時に使うもので、特にアクアブルーのような淡い色の石には高い洗浄効果があるそうだ。

緑の石は〈風の魔石〉で、風を発生させるのに使う。〈火の魔石〉と組み合わせればドライヤーになるし、〈氷の魔石〉と組み合わせればクーラーになる。

それなら、〈水の魔石〉と〈火の魔石〉を組み合わせたら何が作れるだろうか。あたたかい水が出せるわけだから、たとえば給湯器とか？ お湯の温度はどうやって設定するのだろう。どんな機構と魔動回路が必要だろうか。どれくらい小型化できるだろうか。

いつもの癖で夢中になって考えているうちに、男性はドロップアイテムを拾い終わったようだ。あまりめばしい収穫はなかったようで、小さく嘆息しながら革袋の口を縛<sup>しば</sup>っている。

遙人は急いで本をしまうと、男性のもとに駆け寄った。

「あの、遅くなりましたが、助けてくださってありがとうございます」

「アイテム目当てで手を出しただけだ。気にするな」

「でも、あんまりいいものは出なかったんでしょう？」

「そういうこともある。こればかりは倒してみないとわからないからな。運試しのようなものだ」

「運試しであんな危ないことしてるんですか？ 下手したら死ぬのに……？」

魔獣のあの恐ろしさたるや、今も臍<sup>みかた</sup>に焼きついている。

ぶるりと身をふるわせる遙人を見て、男性は軽く肩を竦<sup>すく</sup>めた。

「死なないように訓練している。それでも冒険者だからな」

「えっ。冒険者なんてすごい！」

まるで物語の世界のようだ。本当にその職を名乗る人がいるなんて。

条件反射で目を輝かせる遙人に、男性はなぜか顔を顰<sup>しか</sup>めた。

「すごいことなどない。冒険者ギルドに登録すれば誰でもなれる。まあ、そこからランクを上げるのはそれなりに苦労するだろうが」

「そうなんです。ちなみに、あなたのランクはどのくらいなんですか？」

「S級だ」

こともなげに返され、驚きのあまり言葉に詰まる。

「え……、S級？ それってかなりすごいことなんじゃ!?」

聞けば、ドロップアイテムを求めて旅を続けるうちに冒険者ランクがカンストしたのだそう。ギルドでは「向かうところ敵なし」と賞賛されているのだとか。

「結果としてそうなったというだけの話だ。俺は異端の冒険者だ。己の利益しか頭にない」

「異端って……ドロップアイテムが目的だからですか？」

気になって訊ねたものの、あまり歓迎しない話題なのか、男性が答えることはなかった。

逸らされた視線を遙人は目で追いかける。

「どんな目的だったにせよ、あなたがぼくの命の恩人なのは変わりません。本当にありがとうございますでした」

そう言った途端、男性は弾かれたようにこちらを見た。

自分から目を逸らしたことなんて忘れてしまったかのようだ。おまけにまじまじと見つめられ、失言でもしたかと不安になる。

「あ、あの……？」

声をかけると、男性は詰めていた息を吐き出し、それから静かに首をふった。

「何でもない」

それ以上は訊くなことだろう。自分で自分のことを『異端』と言うくらいだ。それなりの事情があるに違いない。

それでもなんだか気になって目を逸らせずにいた遙人は、ふと、男性が腰から提げている長剣の鞘がずいぶん傷んでいることに気がついた。よく見ると、肩当てにもたくさん傷がついている。

「長い間、冒険されているんですね」

遙人の視線に気づいた男性が剣を見下ろし、「ああ」と頷く。

「それなりに。あちこちにぶつけてしまった。肩当ても岩に擦ったり、魔獣に噛みつかれたりで散々だ」

「あの、よかつたらばく直しましょうか？」

「直す？ そんなことができるのか」

「たぶん。こう見えても錬成スキルを持っているんです」

この力があれば物体を魔力で変形させたり、効果を付与したりできると神様が言っていたから、きつと修繕もできるだろう。念のため『魔法入門』と書かれた本を捲って見たが、思ったとおりだ。もともとの専門分野に近いこともあってやり方もすんなりイメージできた。

「なるほど。へこんだところは成形魔法で整えればいいのか。専用治具がなくてもいいのは助かるなあ。表面の傷はこの魔法で、っと……」

「大丈夫か？」

「はい。バッチリです。それじゃ、ちょっと失礼しますね」

まずは長剣の鞘に手を翳す。手のひらに意識を集中させると、ふわっと淡い光が出現した。魔力が具現化したものだ。

「なっ」

「あ、動かないでください。すぐに終わりますから」

とつさに身を引きそうになる男性を宥め、鞘の表面を撫でるようにゆっくり手を動かしていく。強い衝撃で形が歪んでしまったところは内側から打ち出すイメージで、細かな傷痕はもとの姿に戻るように念じると、鞘は瞬く間に新品同様の姿を取り戻した。

遙人は続けて、目線より高いところにある肩当てにも手を翳す。数え切れないほどの爪痕や獣の噛み跡を丁寧に補修することで、はじめて身につけたであろう時の姿にまで修復してみた。

傷だらけだった武具がピカピカに蘇ったのを見て、男性は目を丸くする。

「驚いた。あんなにボロボロだったのに」

「ふふふ。ぼくもびっくりしました。こんなにきれいにできるなんて」

ぶっつけ本番だったけれど簡単だし、負担もないし、何より喜んでもらえるのが最高だ。

「そうだ。刃の方はどうですか？ 鞘がそれだけ傷んでたつてことは、刃の方も刃毀れたりしてませんか？」

身に覚えがあったのか、男性は苦笑しながら再び剣を抜く。

「マメに手入れはしているつもりだが、いかにせん欠けたところはどうしようもなくてな。困っていたところだった」

「じゃあ、これも直しちゃいましょう」

「いいのか」

「もちろん。助けてもらったお礼です。……そうだ。せっかくですし、保護魔法もかけませんか？ いろいろできるみたいですよ」

保護魔法と言っても様々だ。

刃を欠けにくくする〈硬質強化〉や、刃を錆びにくくする〈錆防止〉。刃の切れ味を保つ

〈尖鋭維持〉に、剣を素早く動かせるようにする〈速度強化〉などがある。

参考書を覗き込んできた男性はそれらを見て、感心したようにため息をついた。

「こんなことができるのか。どれもありがたい」

「全部いっぺんにやってあげられたらいいんですけど、なにせ初心者でして……どれかひとつを選んでもらえると助かります」

「なら、切れ味のやつを頼む。そこが勝負の分かれ目なんだ」

「わかりました。それじゃ、お借りしますね」

大切な剣を受け取り、まずは成形魔法で刃毀れた箇所を修繕する。

次に、あらためて保護魔法のための魔力を練ると、剣に〈尖鋭維持〉を施した。

遙人が手を翳したところから青白い光が刃全体に広がり、キィイーンという耳鳴りのような音を出す。剣が魔法に共鳴し、力を受け入れつつある証だ。

やがて光は刀身に吸収されるようにしてゆっくりと消えていった。

「よし、できた！ これで誰かに魔法を打ち消されたり、剣を物理的に破壊されたりしない限り、半永久的に鋭い切れ味を保つことができます」



「どれ。さっそく試してみよう」

遙人から剣を受け取った男性が感触を確かめるように素振りをする。

するとその瞬間、遠くにあった枝がスパッと断ち切られて地面に落ちた。空気まで切り裂く鮮やかな切れ味にふたり揃って目を丸くする。

「すごい！」

「何事だ、あれは」

落ちた枝と目の前の男性を交互に見た遙人は思わず噴き出し、それを受けて男性もわずかに頬をゆるめた。

「これでお礼はできたでしょうか？」

「もちろんだ。俺にはラッキーすぎるぐらいだな」

男性が大きく頷く。

これまでのモノづくりとはだいぶ違うけれど、もらった力を活かして役に立てたし、相手の喜ぶ顔も見られて良かった。空気を切って枝が落ちるなんておもしろいものも見られたし。

「ふふふ。良かったあ」

ふにやつと頬がゆるむ。

あまりにのほほんと笑ったからか、それを見た男性が一瞬戸惑うように動きを止めた。

剣を鞘に戻すのも忘れ、食い入るように見つめてくる。気づいた時には精悍な顔がすぐそこまで迫っていて、遙人はわたわたと後退<sup>あとずさ</sup>った。

それを見た男性もハッと我に返ったように表情を変える。

「す、すまない」

「いいえ。ばくこそその、緊張感がなくて……」

「いや。おまえは冒険者じゃない。そのままがいい」

なぜか言葉尻を奪う勢いで肯定される。

男性は大仰な仕草で剣を収めると、空気を変えるように咳払いをした。

「ひとつ訊ねたいんだが、おまえは魔道具師か」

「魔道具師？ 何ですか、それ」

「魔道具を作る職人のことだ。さっきの本にも書いてあったろう」

「えっ」

慌てて鞆から参考書を引っ張り出したところ、『魔法入門』どころか『魔道具入門』なる本まで出てきた。

「手引き書まで持っているくせに知らなかったのか？」

「え、えーと……あはは」

不思議そうな顔をする男性に笑って誤魔化しつつ、大急ぎでページを捲<sup>めく</sup>る。

それによると魔道具とは、誰でも安全に魔法を使えるようにサポートする道具のことだそう。

さっき考えた〈風の魔石〉＋〈氷の魔石〉Ⅱクーラーや、〈水の魔石〉＋〈火の魔石〉Ⅱ給湯器

のように、たとえ魔力を持たない人でも魔道具を活用することで暑い季節を凌ぎやすくなったり、

寒い季節に洗いものがしやすくなったりする。電気もガスもないこの世界ではとても重宝されているようだ。

魔道具と言ってもいろいろで、飾って楽しむ観賞用の魔道具なんてものもあるらしい。

戦闘補助具や護身用アクセサリーは魔導具と呼ばれ、魔道具とは区別されている。

「へええ」

どれもとてもおもしろい。

それでも、やっぱり自分が惹かれるのは実用的な魔道具だった。転生前も家電メーカーの技術者として人々の暮らしを便利にしたいと仕事に打ち込んできた。志半ばで生まれ変わったからこそ、あらためて夢の続きを追いかけてみたい。

「ぼく、魔道具師になりたいです！」

勢いよく宣言すると、男性は目を睜<sup>みは</sup>り、ややあつて「ふはっ」と声を立てて笑った。そうやって笑うと鋭く尖っていた印象が和らぎ、途端に親しみやすくなる。

だから遙人も嬉しくなつて「ふふふ」と笑い返した。

「ずいぶん思いきりがいいんだな。今知った仕事だろうに、もうそれに決めるのか」

「はい。モノづくりが大好きなので、それで身を立てられるなんて最高です」

いくらスキルや材料を与えられても、それで何をするかわからないままでは先に進めなかった。

魔道具師という具体的な目標を与えてもらって目の前が晴れたような気さえる。

「きつとぼくの天職になります」

「気の早いやつだ」

満面の笑みを浮かべる遙人に、男性は大人びた苦笑を返した。

黙っていると怖い人に見えるのに、驚いた顔や感心した顔、笑った顔といろいろな表情に触れるうちになんだか親しみが湧いてくる。もともとキリリとしているだけに、ふとした瞬間にガードがゆるんで人間味が見えるのもいい。

ますます嬉しくなつて頬をゆるめている間にも男性は手際よくブーツのベルトを締め直し、旅の支度<sup>しと</sup>を調えた。

「さて。俺はそろそろ行こうと思う。世話になったな。礼を言う」

「あ……」

急に現実に取り戻され、名残惜しさが声に出た。せつかく知り合つたのにもうお別れだなんて。それでも、感謝を込めて見送ろうと遙人はにっこり笑った。

「お礼を言うのはぼくの方です。危ないところを助けてもらった上に、生きる目標までもらったんですから。本当にありがとうございます」

「大袈裟なやつだ。これから元氣だな」

「はい。あなたも」

お互いの姿を目に焼きつけるように見つめ合う。

やがて、男性は踵を返した。一步、また一步と遠ざかつていく後ろ姿をじつと見送る。

けれど、いくらか行かないうちにその歩みはピタリと止まり、男性がこちらをふり返った。

「つかぬことを訊くが、おまえはこれからどうする。どこへ行くつもりだ」  
「え？ えっと……」

まだ決めていない、というか、何もかもが決まっていない。

どう答えたものかと目を泳がせているうちに男性が目の前まで戻ってきた。

「どうも心配だな。また魔獣に襲われでもしたら今度こそ死にそうだ」

「ぼくもそう思います……」

「だったらどうして森なんかに来たんだ」

「ですよねえ」

——神様が悪いんです神様が。

口に出せない言葉を飲みこんでいると、男性はやれやれと大きく肩を竦めた。

「これまでずっとひとりで旅をしてきた。これからもそのつもりだったが、どうもおまえは放っておけない」

「え？」

「それに、おまえがいれば剣が欠けても安心だ。俺もおまえを危険から守ってやれる」

「それって……」

彼が何を言おうとしているのか、予感めいたものが浮かんで胸が高鳴る。

男性は遙人を見下ろし、力強く頷いた。

「一緒に来るか」

「いいんですか！」

「このまま置いていったんじゃ俺も寝覚めが悪いからな」

思わず「わっ！」と歓声を上げた遙人に、男性がしっかりと釘を刺す。

「言っておくが、楽しい旅なんかじゃないぞ。ドロップアイテムを手に入れるのが目的だ。どこへ行くかも、いつ終わるかもわからない。それでも来るか」

「はい。これもご縁です。喜んで」

遙人は満面の笑みで右手を差し出した。

「まずは自己紹介をさせてください。ぼくは七瀬遙人と……」

そこまで言いかけ、ふと、日本の名前はこちらの世界に向いていないかもしれないと思い直す。それなら子供の頃の渾名あだなだった『ハル』で通そう。

「えっと、ハルと言います」

「なんだ。自分の名前なのに言い間違えたのか」

男性はゆるく苦笑すると、黒い革手袋をした右手を差し出した。

「俺はランバートだ」

「ランバートさん。これからよろしくお願いします」

「ああ。俺もよろしく頼む」

お互いに目を見交わしながら握手を交わす。

握り返された力の強さに悶える遙人を見て、ランバートが声を立てて笑った。



力強くて頼もしく、それでいて爽やかさも感じさせる声だ。そろそろと上目遣いに見上げると、いつそう親しみやすくなった琥珀色の瞳が自分を見ていた。

「わ……」

妙にドキッとしてしまい、それを誤魔化すため遙人は先に立って歩き出す。後ろでランバートが嘆息してもお構いなしだ。

かくして、遙人あらためハルはランバートとパーティを組み、冒険の旅に出ることとなった。

## 第二章

森は、ランバートの言うとおりあらゆる危険に満ちていた。

あちこちから恐ろしい魔獣が襲ってくるし、空からは魔鳥も飛んでくる。木の根に足を取られて転ぶし、ぶら下がる蔓に絡まって首は絞まるし、終いには水溜まりですってんころりん、後頭部を打ちつけてタンコブまで作る始末だ。

そのたびに、前を行くランバートが足を止めてハルを助け起こしてくれた。

「おい。大丈夫か」

「すみません。アウトドアは慣れてなくって……」

子供の頃から身体を動かすことが大の苦手だ。筋金入りの運動音痴だし、悲しいかな、『超』がつくほどの方向音痴だと自覚している。もちろん体力なんてあるわけがない。

まだいくらか歩かないうちにゼエゼエと肩で息をするハルを見かねたのか、ランバートが背中を向けるようにしてその場にしゃがんだ。

「しかたがない。負ぶってやる」

「えっ。いえいえそんな、ぼくなら歩けますから」

「その調子じゃ日が暮れる。早く乗れ」

「そんなこと言ったって……一応成人男性ですし、そこそ重たいと思いますよ？」

「訓練か何かだと思ふことにする。それに、もし戦いにでもなったらおまえはその辺に放り投げるから心配いらん。だからそれまで休んでいろ」

「えええ」

それは「心配いらん」ことなのか、どうなのか。

顔を顰める間にも、早くしろとばかりに促され、ハルはしかたなく広い背中身を預けた。

誰かに負ふわれるなんて小さな子供の頃以来だ。そんな記憶も、今となってはもう遠い。

ランバートが立ち上がった途端、視線がゲンと高くなつて懐かしい感覚が蘇るのと同時に、彼の纏う鎧から立ち上る革の匂いや埃っぽさ、そしてランバート自身の香りが一気に押し寄せてきて、ハツとなった。

冒険者らしい、最前線で戦う男の匂いだ。

「ずいぶん軽いな。ちゃんと食ってるのか」

その上、声まで至近距離から聞こえてくる。背負われているのだから当然だとわかつていても、やはりドキツとしてしまう。つい身体が仰け反つてしまい、「暴れるな」と叱られた。

「落ちたらまたタンコブができるぞ。しっかり掴まっていり」

「す、すみません」

「それにしても……華奢には見えたが、思った以上に痩せているようだ。こうなったら、旅の間はできるだけたくさん食わせよう。体力をつけるにしてもまずは食うことが先決だ」

「はあ」

「見たところ十四、五歳ぐらいか。育ち盛りのうちにしっかり身体を作っておかないとな」

「あの、お氣遣いいただいたところ恐縮ですが、これでも十八歳らしくてですね」

「……うん？ おまえは時々、自分のことなのに他人事のように言う」

「あつ」

慌てて手で口を押さえる。

それでもハルがギクリとしたことには気づかなかつたのか、あるいは見逃してくれたのか、ランバートは苦笑しただけだった。

「それから、おまえはもっと身体を鍛えた方がいい。俺が稽古をつけてやろうか」

「えつ。S級冒険者の稽古だなんてそんなの死んじや……いえつ、何でもないです。遠慮します。ぼくがどれだけ筋トレしたって、ランバートさんみたいに格好良くなったりしませんから」

むしろボロ雑巾のようになって寝込む未来しか見えてこない。

容易に想像のつく未来にげっそりするハルとは反対に、ランバートがピクリと肩を揺らした。

「……………そういうことをさりとて言うな」

「へっ？」

ずいぶんと低い声だ。怒っているのだろうか。

はじめは意味がわからずきょとんとしていたハルも、後ろから顔を覗き込むうちにランバートが照れているのだとわかった。

「ふふふ。ランバートさんは格好いいですよ。強くて、遅しくて、それに大人っぽくて」  
「だからもういい」

案の定、憮然とした声が返ってくる。

照れ隠しの下手な彼に、悪いと思いつつもハルはどうとう声を立てて笑った。ランバートの思いがけない一面を知ってなんだか得したような気分だ。

「そういえば、ランバートさんっておいくなんですか？」

「二十八だ」

「じゃあ、ぼくより十歳も年上なんです。いつから冒険の旅を？」

少し考えるような間があった後で、沈黙を埋めるようにランバートはハルを背負い直した。

「……もう、十年になるな」

「十年！ そんなに長い間、魔獣と戦ったりしてたんですね。すごいなあ」

「ただドロップアイテムがほしかっただけだ。……それでもまだ、本当に必要なものは手に入っていない」

「そうなんです。ランバートさんの必要なものって……」

最後まで言い終わらないうちにランバートの足が止まる。

「あの」

「シッ。静かに」

彼の纏う空気が一変した。

旅の間、ランバートが獣と戦う場面を何度か見たからわかる。そうやって、近くにいてであろう魔獣の気配を探っているのだ。

「東の方角に三、四頭といったところか。おまえは隠れている」

ランバートは近くの茂みにハルを隠し、立ち塞がるようにして剣を抜く。

するとすぐ、森の奥から大型魔獣が現れた。灰色の毛は泥に塗れ、顔も血でべっとり汚れている。どうやら獲物を食ってきたばかりのようだ。ひどく昂奮しているのか、口から白い煙のようなものを吐いている。

「煙狼だ。あの煙を吸い込むな。俺がいいと言うまで伏せているんだ」

「はい」

ハルが身体を小さくすると同時に戦いが始まり、煙狼の咆吼に混じって空が切り裂かれる音が響いた。ランバートが〈尖銳維持〉の剣によって遠くから魔獣を一刀両断したのだろう。

すぐに勝負はついたようで、煙狼の断末魔すらあつという間に掻き消えた。

その間、わずか数分足らず。毎度のことながら見事なものだ。

「終わったぞ」

「お疲れさまでした」

そろそろと茂みから這い出る。

服についた枝や葉を払っていると手を出すよう言われ、手のひらに何かを乗せられた。今落ちたばかりの魔獣の牙だ。



「こういうものも、いつかおまえの役に立つかもしれないな。確か、魔道具の素材になると聞いたことがある」

「そうなんですか」

調べたところ、〈煙狼の牙〉というらしい。煙を吐く狼らしく幻覚効果があるようだ。

ということは、この効果を付与した服を纏えば、周囲の目を誤魔化せるのかも。たとえば人目を避けたい時や、サプライズでびっくりさせたい時、それから悪用は良くないけれど、どこかへ忍び込む時なんかにもうってつけだろう。

「魔道具って、アイディア次第でいろんなものが作れそうですね。すごく楽しそう！」

「ははは。せっかくやる気になったところですよですが、日が落ちる前に先に行こう。この辺りは夜になると獐猛な獣が出やすいんだ」

「おっと。それなら急いで離れましょう」

日没まであといくらない。

ハルはもらった〈煙狼の牙〉を鞆にしまうと、ランバートを先頭にまた一列になって森を進んだ。生い茂る草木を掻き分け、木の根を歩き、そうしてどれくらい歩いただろうか。

辺りが薄暗くなりはじめた頃、ちよいどいい平地に着いた。近くには小川もあるようだ。

「ここで夜を明かすとするか。俺は辺りに危険がないか確認してくる」

「じゃあ、ぼくは水を汲んできます。それから夕飯用に魚釣りも」

勇んで川に向かおうとしたものの、なぜか「待て」と襟首を掴んで止められた。

「この辺りの川は去年、有毒魔獣に汚染された。毒自体はだいぶ薄まっているとはいえ、飲んだら身体が痺れるからやめておいた方がいい。魚も死んだ。釣り糸を垂れても時間の無駄だ」

「そ、そんな……」

食料どころか水さえ確保できないなんて。

「そう落ち込むな。何とかする。おまえはここにいろ」

ランバートはそう言って茂みの奥に入っていくと、しばらくして一羽の野鳥と大量の枝を抱えて帰ってきた。周辺調査のついでに食料まで確保してきてくれたらしい。

「すごい！」

彼は倒木を切り出し、まな板代わりにすると、慣れた手つきで鳥の羽を拵っていく。

「ランバートさんって何でもできるんですねえ」

「森で生きていくためだ。おまえだって慣れればできるようになる」

ランバートは手早く風除けのための囲いを作ると、落ち葉と小枝を何層にも重ねて火を熾した。囲いの上には横木を渡し、即席のグリル台にする。

「ここで肉を焼く」

「おぉー！」

まさにキャンプだ。これぞアウトドアという感じでテンションが上がる。

けれど、呑気に笑っていられたのもそこまでだった。ランバートが枝に括りつけた野鳥を一羽、そのまま火にかけようとしたからだ。

「わっ、待つて待つて！ それだと外は黒焦げで、中が生焼けになっちゃいけません」  
「そういうものだろう」

「へっ？」

「多少のムラはしかたがない。俺はいつもこうしている」

「い、いつも？ お腹壊したりしないんですか」

「もう慣れた」

「……」

どうも雲行きが怪しくなってきた。

突如として漂い出した緊張感にハルはぐくりと喉を鳴らす。

「それじゃあの、今夜は水が飲めないと思いますけど、どうします？」

「飲まないか、我慢して飲む」

「でもさつき、川には毒があるって……」

「多少は平気だ。おまえは死ぬからやめておけ」

「それ、平気なんじゃなくて、耐性ができるほど毒を摂取してきたってことじゃ……？」

「そうとも言えない」

ランバートがあまりにケロッとしているせいで、訊いている自分の方がおかしいんじゃないかと思えてきた。

——生焼けを食べても、毒水を飲んでも、平気な身体ってどういうこと!?

「えっと、えっと、じゃあ、寝る時はどうしてます？ 魔獣とか危ないでしょう？」

「気配で起きる。襲ってきたら戦うまでだ」

「……………」

ダメだ、これは。

ハルはどうとう片手で顔を覆った。

ランバートがアウトドアに全振りしたタイプだということがよくわかった。長らくひとりきりで冒険していたのだから当然の進化かもしれない。

——でも、これは真似したら死んでしまう……

ハルは大きく深呼吸をすると、平和的な解決の道を探ることにした。

まずは食事だ。お腹を壊したりしないように、しっかりと火を通して食べなければ。

「ランバートさん。すみませんが、ナイフか何かありませんか」

「ナイフ？ これでいいか」

ランバートがベルトに差していた小剣を差し出す。

「ありがとうございます。これで鳥を捌きます。血は後できれいにしますから」  
たぶん浄化魔法でいけるはずだ。

ハルはナイフを受け取ると、鳥を一口大に切り分けはじめた。

転生前は自炊をしていたので肉を切るのお手のものだ。さすがに一羽丸ごと捌いた経験はないけれど、可食部とそうでない部分とを大まかに分けるぐらいならできる。

「そんなに小さくしてしまつて大丈夫か」

「スープにしようと思います。これぐらいのサイズならしつかり火が通ると思いますし、消化にもいいですから」

「スープ？ 煮るのか？ だがどうやって……」

ハルは血がついたものを浄化魔法で清めると、ランバートにナイフを返した。

「それじゃ、ぼくは水を汲んできます。ランバートさんはすみませんが、この倍ぐらい枝を集めておいてください。長時間火を焚くことになるので」

「おい。言つておくが、川の毒は煮沸しゃぶつしたぐらいでは消えないぞ」

「ふふふ。秘策があるんです。きつと大丈夫ですから」

訝いぶるランバートをその場に残し、ハルは今度こそ意気揚々と小川に向かう。

「そのまま飲めないなら、浄化すればいいんだよね」

血で汚れた手やナイフをきれいにしたように。

川縁かわべに着いたハルは、『魔道具入門』に書かれていた〈浄化漏斗〉と、食堂で水を出す時に使うピッチャーをひとつにした、オリジナルの〈浄化ポット〉を作ることにした。

「まずはポットから」

靴からガラス素材を取り出し、成形魔法でポットの形に変形させる。胴体はふつくら丸く、広い注ぎ口と持ち手がついただけのシンプルなデザインだ。

次に、浄化のための〈水の魔石〉を取りつけた。

家電製品が電気で動くように、魔道具は魔力で動く。そのためには魔石の力を伝える魔動回路が必要だ。一見難しく思える設計も技術者であるハルには朝飯前。

ポットの胴体部分に回路を施し、石を嵌め込んだ瞬間、全体がアクアブルーにふわつと光った。

〈水の魔石〉の力が回路を通つてポット全体に行き渡り、魔道具になった証拠だ。

これで、この中に入れた水は飲めるようになったはず。

「よし。さっそく試してみよう」

手が川面に触れないよう注意しつつ、注ぎ口を浸して水を汲む。

それを持つて戻つたところ、ランバートは山盛りの枝を集めて待つていた。

「すごい量ですね。ありがとうございます」

「おまえこそ、水に触れて大丈夫だったか」

「肌は濡らさないようにしましたから。おかげでこのとおり」

ポットを掲げるハルに、ランバートは不思議そうに首を傾げる。

「それは？」

「作りました」

「なるほど。そういうことか」

ランバートがニヤリと笑う。彼は黒手袋を外すと、ハルが汲んできた水を素手で受け、そのまま口に運んだ。

「これは驚いたな……毒を感じない。匂いも無臭だ」



「ほんとですか！ やったー！」

浮かれて飛び上がった拍子にポットの水がざぶんとあふれる。

そのせいで頭から水浸しになったハルは、驚きのあまり目をまん丸にした。

——〈煙狼<sup>えんろう</sup>の牙〉の幻覚効果、使うなら今じゃない……？

もういつそ、姿も声も何もかも透明になるものを被りたいくらいだ。

じわじわと羞恥に頬を染めるハルを見て、ランバートがたまらず「ふはっ」と噴き出す。

「そんなに嬉しかったのか。はじめて作った魔道具だもんな」

「へ、へ……」

恥ずかしいところを見られてしまったけれど、それでも記念すべき魔道具第一号ができたのは誇らしい。ハルは頭からポタポタと雫を垂らしながら愛しいポットを抱き締めた。

「この子がお役に立ちそうで良かったです」

「いいものを作ってもらった。これで安心して食事ができる」

「それじゃ、早速料理していきますね」

まずは鍋が必要だ。

ハルは成形魔法で手頃な寸胴鍋を拵<sup>こしら</sup>えると、〈浄化ポット〉できれいにした水をたっぷり注いで火にかけた。そこに一口大にした肉や、近くに生えていた香草を軽く洗ってから放り込む。

煮立ってくるにつれて浮いてきた灰汁<sup>あく</sup>はレードルを作ってせつせと掬<sup>すく</sup>った。

食材に火が通ったのを確かめて、マジックバッグに入っていた塩で味を整える。他にも調味料が

あればいいのだけれど、いや、もつと言えばコンソメや香味野菜がほしいところだけれど、なにせ突貫アウトドアだ。贅沢は言うまい。

「どれどれ。どんな感じかな」

レードルでスープを一口。

「……んんん……？」

マズくはない。決して食べられないわけじゃない。

とはいえ、残念ながら期待した味にはほど遠いものができ上がってしまった。言ってみれば肉を塩水で茹でただけ。多少は出汁が出るとはいえ、圧倒的に旨みが足りない。

どうしたものかと考えたハルは、「ないなら作ろう！」ということで再びマジックバッグに手を突っ込んだ。調味料や野菜を錬成することはできないけれど、自分には魔道具がある。

取り出したるは〈王蛇<sup>おうじや</sup>の舌〉。

好みにうるさく、偏屈な美食家として知られる魔獣の一種だ。そんな蛇の舌を乾燥させ粉末状にしたものが運良く鞆の中に入っていたので、ありがたく使わせてもらうことにした。

洗ったレードルに満遍なく粉をふりかけ、魔力を使って定着させれば旨みを倍増させる匙、その名も〈美食家の匙〉の完成だ。永続的に使えるアイテムではないだろうが、それでも何もないよりマシだろう。

「おいしくなーれ……おいしくなーれ……」

鍋をぐるぐる掻き混ぜていると何かの儀式のようで笑ってしまふ。

頃合いを見て再度スープを味見したハルは、今度は「わっ！」と目を輝かせた。

「すごい！全然違う！」

さすがは王蛇様、頼りになるなんてもんじゃない。

薄ぼんやりしていた味が締まっただけでなく、肉の旨みもよく引き出され、コクもあって奥深い風味になった。まろやかなスープには鳥の脂がほどよく浮かび、きらきらと輝いて食欲を誘う。

これなら腹ペコ冒険者もきつと喜んでくれるだろう。

「あれ？　そういえばランバートさん、どこ行っただろう……？」

姿が見えない。キョロキョロと辺りを見回していると、果物を手にしたランバートが茂みを掻き分けて現れた。

「おまえばかりに任せるのも申し訳なくてな。食べそうな果物があつたから採ってきた」

「わあ、ありがとうございます。こつちもちょうどでき上がりましたよ」

「そうか。いい香りだ」

ランバートは近づいてくるなり、ひよいと鍋の中を覗き込む。

「ああ、こいつは旨そうだ。おまえは料理もできるのか」

「ただ煮ただけですよ。それに、裏技も使いましたし」

「裏技？」

ハルが〈美食家の匙〉のことを話して聞かせると、ランバートは目を丸くした。

「驚いた。もうふたつ目の魔道具を作ったのか」

「なんか必要になっちゃって。行き当たりばったりですけど」

「そういうのを臨機応変と言うんだ。冒険には必須のスキルだぞ。大したものだ」

プロの冒険者から手放しに褒められてくすぐったい。「えへへ」と照れ笑いすると、それを見たランバートも頬をゆるめた。

「さあ、お腹も空きましたし、冷めないうちに食べましょうか」

「ああ、そうしよう」

手早くスープ皿を作り、でき立てのスープをよそう。ランバートが採ってきてくれた洋梨に似た果物は洗って皮を剥き、一口大に切って平皿に盛りつけた。

焚き火を見ながら並んで座り、ハルは「いただきます」と手を合わせる。すると、ランバートが不思議そうに声をかけてきた。

「今のは、祈りか何かか」

「『いただきます』ですか？　えっと……これはぼくが生まれ育った国の伝統で、食事の前にやる感謝の習慣です。ここにある鳥や果物、それらに対して『大切な命をいただきます』って」

「なるほど。とてもいい考え方だと思う。俺も倣おう」

ランバートが見よう見まねで胸の前で手を合わせる。

「じゃあ、もう一度。いただきます」

「いただきます」

ハルがぺこりと一礼すると、ランバートもそれに倣って頭を下げた。

かくして、楽しい夕食がはじまる。

ランバートはスープを一口啜るなり、「旨い！」と弾かれたように顔を上げた。

「おまえには驚かされ通しだな。即席でこんなに旨いものを作るとは」

「いえいえ。〈美食家の匙〉のおかげです」

「謙遜するな。どんなにいい魔道具があつたとしても、何もないところからスープは生まれない。

匙は最後の仕上げを助けただけだ。おまえの成果だ。それに、俺が料理をしていたら今頃生焼けの肉を食っていたらうからな」

「うっ」

想像しただけでお腹を壊しそうだ。

途端に顔を顰めたハルを見て、ランバートは明るい声を立てて笑った。

「ランバートさんって、戦うことにはすごく向いてるのになあ」

「それしかできないとも言いがな」

「ぼくには散々『栄養のあるものを食べ』って言ったのに」

「それはおまえが痩せているからだ。見ろ、手首だってこんなに細いじゃないか」

すぐ横から手が伸びてくる。ハルがランバートの手の大きさに驚いている一方で、ランバートもハルの手首を掴んで驚愕したようだ。

「おい、とんでもない細さだな。今すぐ食べ。鍋の中身全部だ」

「無理ですって！」

目の前にあるのは寸胴鍋だ。軽く五人分はある。

ハルが嘔き出すと、それを見たランバートも一緒に頬をゆるめた。

「ランバートさんこそ、お口に合うようでしたらたくさん食べてください。ぼくがはじめて拵えた魔道具で作ったスープです。ランバートさんに魔道具師っていうものを教わったおかげで、できたようなもので」

「努力の成果というわけか。それなら遠慮なくいただく」

ランバートは頷くなり、猛然とスプーンを動かしはじめた。あつという間に皿の中身を平らげたばかりか、二杯、三杯とおかわりを重ねる。そしてハルがぼかと見守る前で、彼はとうとう鍋を空っぽにしてみた。

「ひゃー……気持ちのいい食べっぷり！」

「それぐらい旨かった。おまえは料理もできるし、魔道具も作れる。実に大したものだ」

「もう。褒めすぎです」

笑い合いながらデザートの果物もペロリと平らげ、揃って「ごちそうさま」をする。

その後は、ランバートは寝場所の整地に、ハルは食器の浄化にそれぞれ勤しんだ。

きれいにした寸胴鍋や皿は明日以降も使えるよう、全部マジックバッグにしまう。本当は冷たい水をたっぷり汲んだ〈浄化ポット〉も入れておきたいところだけれど、中でこぼれるかもしれないのでパスだ。

その代わり、明日どこかで時間を見つけて蓋をつけられないかやってみよう。持ち手ももう少し



太く、短くすれば、中に水をたくさん入れて重くなった時でも持ちやすくなると思う。

試作品の改良はモノづくりと同じぐらい大好きだ。技術者魂を刺激されるし、何度やってもわくわくと胸が躍る。

ああでもない、こうでもないと考えていると、後ろから「ハル」と呼ばれた。

「整地が終わった。そっちはどうだ」

「ぼくもちょうど終わりました。それじゃ、今度は寢床を作っていきましょう」

鞆から端切れを引っ張り出し、成形魔法で大きくする。次に擬態効果のある〈七色鳥の羽根〉を取り出すと、できたばかりの生地に魔力を付与した。

ハルは布を広げ、あちこちから矯めつ眊めつ出来映えを確かめる。

「うん、いい感じ」

「これをどうするんだ？」

「テントにします。〈七色鳥の羽根〉の効果で、森に同化して見えるはずですよ」

「なるほど。考えたな」

ランバートに手伝ってもらって支柱を立て、その上に布を被せれば即席テントのでき上がりだ。四隅を地面に杭で打ち込み、中にはふたり分の布を敷いた。これで魔獣の襲来を恐れることなく、朝までぐっすり眠れるだろう。

「まずは今夜試してみて、明日以降どんどん改良していきましょう」

「改良？ もう充分じゃないか？」

「何言ってるんです。しつかりつき合ってもらいますよ」

道具はより便利に、より使いやすく磨いてこそ。それは魔道具であっても同じことだ。

ふんふんと鼻息を荒らげるハルに、ランバートは苦笑しながら焚き火を指した。

「まあ、まずは一段落だな。寝る前に少し座ろう」

「はい」

促されるまま、火に向かって並んで座る。

こちらの世界に来てからというもの、異世界だ、魔獣だ、冒険だと大忙しだったこともあって、ぼんやり焚き火を眺める時間がなんだかとても贅沢なものに思えた。だからもつと味わいたくて、ハルは両足を抱えて膝の上に頭を乗せる。

いつしか夜が森を包んでいた。

闇を押しやるように真つ赤な炎が揺らめいている。燃え殻が爆ぜるパチパチという音を聞いていると心がゆっくり解けていくような、どこか懐かしい気分になった。

「今日は、いろんなことがありましたね」

「ああ。旅の道連れができるとは思わなかった」

隣でランバートも含み笑う。

そつと視線を向けたハルは、炎に照らされた精悍な横顔に思わず見入った。目が吸い寄せられたきり逸せない。

ランバートはじつと焚き火を見つめ、何か考えているふうだったが、ややあつて意を決したよう

にこちらを向いた。

「立ち入ったことを聞くが、おまえはどこから来た。どうしてあの時、森にいたんだ」

「あ……」

一瞬、答えに迷う。

転生したと言ったら彼はどう思うだろう。信じられないと戸惑うだろうか。体よく誤魔化されたと訝るだろうか。もし自分が彼の立場だったらとてもすんなりは飲み込めないと思う。

それでも、ランバートに嘘はつきたくない。

ハルは少し迷った上で、日本という国から来たこと、気づいたら森にいたことを打ち明けた。

「二ホン……というのは遠いのか？ おまえはそこに帰る必要があるんだろう？」

「いいえ。もう二度と帰れないんです。……でも、しかたありません。これもぼくの運命だと思うから、受け入れますよ」

ランバートは目を瞠みはった後で、そろそろと息を吐き出す。

「おまえは、強いな」

「まさか。強いのはランバートさんの方ですよ」

「違う。そういう強さじゃない」

間髪を入れず首をふったランバートに、ハルは一拍置いて「ふふ」と笑った。

「わかってます。……ランバートさんみたいな人に褒めてもらえたのが嬉しくて」

正直なところ、自分でもまだ心の整理はついていない。それでも前に進むしかないのだ。

そう自分に言い聞かせていると、隣から大きな手が伸びてきて髪をくしゃりと掻き混ぜられた。

慰めとも、励ましとも取れるやさしい手つきに胸の奥がトクンと鳴る。

「どこにいてもおまえはおまえだ。応援する」

「ランバートさん……」

生まれてはじめての感覚に胸を押さえながら、ハルは明るく顔を上げた。

「ねえ、ランバートさん。よかったら教えてもらえませんか。この国のこと」

「よし。よかった」

ランバートは近くに落ちていた枝を取り上げると、地面に絵を描きながら話しはじめる。

「俺たちがいるのはマインシュタット王国と言って、城塞都市マイネルを中心に繁栄する大国だ。都の東側には恐ろしい森があつてな。一度足を踏み入れたが最後、二度と生きて戻ることはないと噂されている」

「えっ。ここより恐ろしい森があるんですか」

思わず声が出た。

「言っておくが、このヴダスの森は都市の周りで一番安全だと言われている」

「これで!？」

魔獣も魔鳥も湧き放題、襲われ放題だったというのに。

旅の道中を思い出してげんなりするハルに苦笑しながら、ランバートは絵を追加した。

「ここがヴダスの森。東の森はこの辺りだ。東の森の魔獣はとにかく気性が荒い。絶対にひとりで

行かないように」

「もちろんです。頼まれたって絶対嫌です」

瞬殺される未来しか見えない。

「ここより恐ろしいところもあるんですね。それじゃ、誰も行かない森ってことですよね？」

「普通の人間はな」

「その話しぶりからすると、ランバートさんは行くんですね」

「珍しい魔草や素材の宝庫なんだ。そのため危険を省みず<sup>かつら</sup>に立ち入っては、命を落とす魔法使いや錬金術師が後を絶たない。だから、代わりに採取を行ったり、魔獣を討伐したりする冒険者稼業が盛んになる。俺もそのひとりだ」

「そうなんですね。でもそれって、常に危険と隣り合わせなんじゃ」

「その分報酬もいいぞ。まあ正直、金はどうでもいいが」

「じゃあ、どうして……？」

自分だったら考えられない。命を危険に晒<sup>さら</sup>した挙げ句、報酬はどうでもいいなんて。

そういえば、彼はドロップアイテムを集めているのだった。それなら東の森にはいいアイテムを落とす魔獣たちが集まっているのだろうか。

あれこれと考えていると、こちらを見たランバートが小さく嘆息した。

「おまえが自分のことを話してくれたのに、俺だけ黙っているのはフェアじゃないよな」

「え？」

彼は一瞬、遠くを見るような目になる。

「おまえは俺を『命の恩人』だと言ったな。……俺にはかつて、助けてやりたかった相手がいた。

妹だ。俺は、幻の魔石を妹の墓に供えてやりたくて旅をしている」

揺らめく炎を見つめながらランバートは静かに思い出を繙<sup>ひもと</sup>いた。

「妹は俺より三つ年下で、ティナという名だった。生まれた時から身体が弱かったが、立て続けに親を亡くした俺たちに医者にかかる金なんてなくてな……。それでも心配かけまいと気丈に笑ってみせる妹を、俺はなんとか助けてやりたかった」

そんな時に耳にしたのが、『幻の魔石』と呼ばれる赤く美しい石の話だった。

「万能薬の材料になる〈カーバンクル〉という名の魔石だ。魔獣を倒した際にドロップアイテムとして出現すると言われているが、その確率はかなり低い。よしんば出たとしても稀少品ゆえに市場にはほとんど出回らない。当然かなりの高額だ。だから俺は自分で探すことにした」

「それで魔獣を倒す旅を？」

ランバートが無言で頷く。

当時のことを思い出しているのだろう。彼は苦いものを噛み締めるように顔を歪めた。

「魔獣を倒して倒して倒しまくった。森を出るのは妹を見舞う時と、ギルドに達成報告をする時だけだ。その足で街の素材屋に行つてドロップアイテムを金に換えて、装備屋で防具や剣を新調して森に戻る。そのくり返しだ。それでも〈カーバンクル〉は出なかった」

そんな暮らしを四年も続けた頃。幻の魔石を手に入れるより早く、彼の唯一の肉親にして最愛の

妹は亡くなった。ランバートは旅をする理由を失い、自分自身さえ見失った。多額の報奨金も、S級冒険者という称号も、大切なものを失った彼の心は癒やせなかった。

「はじめて味わう大きな挫折だった。絶対に助けてやると約束したのに……！」  
ランバートは昂ぶった気持ちを押し込めるように息を吐く。

「そんな時だ。〈カーバンクル〉に『魂を慰める』という言い伝えがあると聞いたのは……ティナからのメッセージのような気がした。若くして亡くなったあいつの魂を慰めるために、俺は今も〈カーバンクル〉を探し続けている」

決意を語るランバートの横顔をハルは息を詰めてじっと見つめた。

彼がはじめて冒険の旅に出たのは十八歳。

旅の目的を失ってもなお、初心を貫き続けていることに驚いた。もはや意地だ。再び立ち上がるまでにどれだけの苦しみがあったか、歩き出してからもどれほどの無念に苛まれたのか、自分には想像すら及ばない。旅は彼なりの供養でもあるのだろう。

「やっぱり、ランバートさんは強い方です」

詰めていた息を吐き出しながらハルは思わず呟いた。

「恐ろしい敵に立ち向かう勇氣だけでなく、心の強さにも圧倒されてしまいました。苦しかったでしょうに……それでも前を向き続けるなんて、誰にでもできることじゃありません」

「実際には褒められたものじゃない。ただ自棄<sup>やけ</sup>になっただけだ」

「それでも乗り越えたじゃないですか。心の中にいるティナさんに誇れる自分であるようにって、

自分で自分を励ましながら頑張ってきたんじゃないですか？」

「心の、中に……？」

「強くてやさしいお兄さんを誇らしく思っていたはずですよ、ティナさんは。今でもきつと」

自分が同じ立場だったらそう思う。自分を助けようと遮<sup>しや</sup>二無<sup>む</sup>二頑張<sup>む</sup>つてくれる兄の姿は、きつととても頼もしく、そして眩しく映ったに違いない。

ランバートは目を見開き、やがてハルの言葉を囁み締めるようにゆっくりと目を細めた。

「そんなふうに考えたことはなかった。……そう、だろうか。そうだったらいいな」

「もちろん」

背中を押すつもりで力強く頷く。

ランバートは大きく息を吐き出した後で、ふと我に返ったのか、照れくさそうに下を向いた。

「誰かにティナの話をするのははじめてだ。人に聞いてもらうなんて考えたこともなかった」

「ぼくで良かったんでしょうか」

「ああ。おまえで良かった。……いや、おまえだから良かった」

ランバートがハルの目を見て言い直す。それから彼は、自分自身の心に向き合うようにもう一度焚き火に目をやった。

「俺は長い間、自分で自分が許せなかった。ティナとの約束を守れなかった自分を恥じてもいた。だが、今の俺を受け入れてもいいのかもしれないと、おまえに言われてはじめて気づいた」

「いいんですよ！ そんなの当たり前じゃないですか！ ランバートさんは言ってくれたでしょ

う、『おまえはおまえだ』って。だから、今度はぼくが言いますよ。『あなたはあなただ』って。ランバートさんがランバートさんとして存在するだけでいいんです。どうかご自分を責めたりしないでください」

ハルは一度言葉を切ると、「それに」と戯けて片目を瞑る。

「ランバートさんに生活能力がないのは知ってますし、それはぼくがカバーしますから」  
「おい」

「まあまあ。ぼくの運動音痴や方向音痴はランバートさんがカバーしてくれたでしょう」

「まったくひどいものだったからな」

「ちよつと！ 少しはやさしくしてくださいよ」

はじめは苦笑に留めていたランバートだったが、ハルの顔を見るうちに我慢できなくなったのか、とうとうふたり揃って噴き出した。

「おまえのおかげで心が軽くなった。礼を言う」

「お役に立てて良かったです。ランバートさんの事情も教えてもらいましたし、これからはもっと気合を入れて協力していきますね」

「心強いことだ。おまえには本当に助けられる」

「いえいえ、そんなのぼくの方が」

「いや。俺だ」

負けず嫌いはお互い様か。再び顔をつき合わせたふたりは、またしても「ぶっ」と噴き出した。

あんまり笑ったものだから涙まで出てきてしまい、それを手の甲で拭うハルを見て、ランバートが感慨深げに目を細める。

「こんなに笑ったのは久しぶりだ。ティナが生きていた頃以来かもしれない。……ハル。おまえに出会えたことは俺にとって大きな意味があったのだと思う」

「……え？」

一瞬、反応が遅れた。なんだかとても大切なことを言われた気がした。

「いや、何でもない。そろそろ寝よう」

それなのにランバートは話を切り上げ、早々にテントに入っていつてしまう。その頬がうつすら赤らんでいたように見えたのは自分の気のせいだっただろうか。

ふわふわした心地とともにハルもテントに向かう。

こうして、波瀾万丈な異世界一日目は更けていくのだった。

次の日から、〈カーバンクル〉を求めて魔獣を倒しつつ、〈浄化ポット〉の改良に取り組む日々がはじまった。

ハルはもちろん後者の役目だ。

把手<sup>とって</sup>を調整したことで前より水を注ぎやすくなったし、蓋もつけたので移動の際に水がこぼれる心配もなくなった。おかげで毎日大活躍だ。これとマジックバッグさえあれば、いつでもどこでも



## 立ち読みサンプル はここまで

安全で冷たい水を飲むことができる。

それぞれの役割をこなしつつ、ともに旅を続けること五日。

ふたりはいったん森を出て、ドロップアイテムを換金するため城塞都市マイネルに向かうことになった。

森しか知らなかったハルにとつては何もかもが新鮮だ。道中、牧草地の羊や農地を耕す人たちにいちいち立ち止まっては見入ってしまったし、巨大な都市の門が見えた時なんてあまりの大きさにあぐりと口が開いた。

そしてそれ以上に、門を潜った先に広がるにぎやかな街に度肝を抜かれた。

「うわあ……！ 本当にこんな世界があるなんて！」

映画で見た近世ヨーロッパの街そのものだ。大通りには石畳が敷かれ、その上を人や荷車がひっきりなしに往来している。通りの両側には店がずらりと並び、威勢のいい呼び込みや客同士笑い声が絶え間なく響いていた。

なんて活気にあふれたところだろう。

はじめて見る城塞都市に興奮が収まらず、キョロキョロしながらランバートについていく。

大通りを抜け、広場の手前で脇道に逸れた彼は、しばらくして一軒の店の前で足を止めた。剣の形の張り出し看板をぶら下げた、こぢんまりとした店だ。

「ここが馴染みの道具屋だ。素材屋も兼ねている」

ランバートが扉を押し開けると、奥にいた店主が大声で「よう！」と声をかけてきた。道具屋と

いうだけあつてがつしりした体つきの、五十代ぐらいの男性だ。

「久しぶりだな、S級殿。またたんまり稼いできたか」

「驚かせるほどじゃないさ。こいつを買い取ってくれないか。それから、いい素材があれば譲ってほしい」

ランバートが腰の革袋をカウンターのの上に置く。

「素材？ 珍しいな。おまえさんが使うのか」

「連れ合いが魔道具師なんだ」

そこでようやくハルの存在に気づいたららしい店主は「へえ！」と驚きの声を上げた。

「一匹狼のおまえさんがとうとうパーティを組んだってか」

「たまたま森で出会ってな。いい道具を作るんだ」

目を丸くしてこちらを見る店主に、ハルははにかみながら会釈を返す。

正式に魔道具師を名乗っていいかはわからないけれど、それでもランバートに「いい道具を作る」と言ってもらえたのは嬉しい。

勝手知ったる他人の店とばかりに店内を物色したランバートは、一目で高級品とわかるケースに入った素材のひとつを手にとった。

「珍しいものが入ってるじゃないか。これをもらおう。それからこれも」

「ランバートさん。それもしかして、〈青竜の鱗〉じゃないですか……？」

「よくわかったな」